

雷のように割れて広がる
毛織物の名前の川
毛の糸はあっちからこっちからはすかいに

たくさんの羊が草を食べて
たくさんの鹿が草を食べて
土がくずれて

川は溢れるのだとIは言う

Iはすりガラスの向こうにいて
鼻の頭がつめたいといった

Iはいつも曇った昼間 時々晴れる
こちらは夜
度々強い風が吹く

あったことのない私達の会話は、犬が散歩するみたいだとIが言う
そうだね
あっちにいたり、こっちにいたり
匂いを嗅いだり

実際匂いはしないんだけど
気配もなく
Iが話すりズムだけを少し覚える

MとTとMは、おおきな川を渡る橋のよこの
この道にはいかなかった
明るい夜に橋を渡ってホテルに向かう
最初のMとつぎのMは別のM
最初のMはゆっくりと二人のあとを歩いて
大きく二つに別れる川の先を眺めた
あとのMが何かを言うけど水の音がおおきくて
何を言っているのかわからない

これはわたしの物語ではなくあなた私の物語でもない

最初のMは2番目のMが使い古した黒い布袋を持って
Pが描いたという青い三角をみている
Pはもういないから
Pが描いたという三角をPではない誰かが描いたのだけど

袋の絵柄はかすれている

黒い袋はひどく重い
中は暗くてきつと水がいっぱい

大きな魚も泳ぐ
最初のMの携帯は水浸し